

プライマリケアにおける 腹部単純X線写真の意義

財団法人脳神経疾患研究所附属 総合南東北病院 消化器センター長 西野 徳之

ドクター西野の
“気づき医療”のススメ

第1回



西野 徳之 (にし のりゆき)

1987年、自治医科大学卒業。旭川医科大学第三内科研究生。90年、利尻島国保中央病院内科医長。94年、同病院院長。2000年、根室市立病院内科科長。同年、総合南東北病院。08年より現職。日本消化器病学会指導医。日本消化器内視鏡学会指導医。産業医。内科認定医。

「お腹が痛い」という患者さんがみえたとき、みなさんはどのような診察をされるでしょうか？ 問診をして、触診、採血、超音波……。腹部単純X線撮影をすることはありますか？ この連載のコンセプトは、このような症例の精査のきっかけに、腹部単純X線写真を活用していただきたいというものです。

明らかな急性腹症なら病院への移送も考えるでしょう。あまり重篤感のない症例だと胃腸薬を処方して、「またいらっしやい」ということもあるのではないのでしょうか。

そんなときに一度、腹部単純X線撮影をしていただきたい。何も腹部単純X線写真ですべてのことを知ろうというものではありません。診察のfirst stepとしての腹部単純X線撮影の意義を、症例を通じてご紹介させていただきます。

まずは、以下の2枚の写真をじっくりご覧いただきたい。みなさんも胸部単純X線写真では、小さなcoin lesionを見逃さないように読影すると思います。この連載では、同様の気持ちで普段より少し長めに腹部単純X線写真を読影してみましよう。



以下の2つの症例の病名はそれぞれ何でしょうか？

(答えは次ページに掲載)

症例1

63歳女性。昨日から右下腹部痛あり受診



写真1

症例2

53歳男性。腹痛と便秘を主訴に来院。毎日出ている便が2日間ない



写真2

読者のみなさまからの、「ドクター西野の“気づき医療”のススメ」コーナーへのご質問、ご要望、ご感想などをお待ちしております。

送り先 エルゼビア・ジャパン株式会社「PCP」編集部
e-mail pcp_kizuki@elsevier.com